

発音指導に焦点を当てた中学校英語教科書分析

An Analysis of Pronunciation Instruction in Japanese Junior High School English Textbooks

杉内 光成

獨協埼玉中学高等学校

Abstract

This paper examines pronunciation instruction features currently included in Japanese junior high school English textbooks for the 2021 academic year. Many previous studies investigated what pronunciation instructions were conducted in the classroom by teachers' self-experience, questionnaires, analysis of textbooks, class observation, and syllabus analysis. However, there is no previous study to focus on textbooks following the Course of Study taking effect in 2021. Six English textbook series were analyzed to treat phonetically related items: phonetic alphabets, stress, intonation, connected speech, identifying thought groups, and oral interpretation. The research found that although each textbook covers these categories in various ways, each textbook's emphasis and ways to provide pronunciation instruction are different. However, the varieties and frequency of pronunciation instruction in English textbooks have significantly increased more than before, which is an excellent sign of emphasizing pronunciation. The result implies that English education in Japan should consider what pronunciation instruction features should be dealt with, and how they are treated during the classroom.

キーワード： 中学校英語検定教科書, 発音指導, 教科書分析

1. はじめに

本稿の目的は、令和 2 年度検定済の中学校英語検定教科書（以下、教科書）における発音を中心とした音声指導項目に焦点をあて、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・相互同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、音声表

現指導の 6 項目を整理し、それらの提示内容や提示方法を分析し、6 社の教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのかを考察し、中学校で行われている発音指導の実態について考えていくことである。

1.1 グローバル社会での発音指導について

現在のグローバル社会において、英語は国際語としての地位を確立し、英語でのコミュニケーションはもはや英語母語話者だけのものではなくなった。Walker, Low, and Setter (2021)によると、全世界の英語使用者のうち非英語母語話者が占める割合は 75%を超え、このことが英語の発音に大きな影響を与えている。英語学習者が目指すべき目標が「母語話者のような発音に近づけること」から「相手に伝わる発音を習得すること」に移り変わってきているのだ。このパラダイムシフトに伴い、Intelligibility-Based Pronunciation Teaching が提唱されており、Intelligibility を向上させるために必要となる音声指導項目を指導すべきであり、すべての分節音や超分節音を指導する必要はないと、発音指導に関する考え方の改革が叫ばれている (Munro & Derwing, 2015; Levis, 2018; Walker, 2010)。

1.2 日本における発音指導の実態

日本の英語教育においても、英語によるコミュニケーション能力の育成を目標として掲げるようになった。また 2021 年度施行の学習指導要領 (以下、学習指導要領) では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせるために身に付けるべき資質・能力の 1 つに「音声」を挙げており、その具体的な指導事項は (ア) 現代の標準的な発音、(イ) 語と語の連結による音の変化、(ウ) 語や句、文における基本的な強勢、(エ) 文における基本的なイントネーション、そして (オ) 文における基本的な区切りの 5 つとされている (文部科学省, 2019)。

しかし、中学校・高校で長年教鞭を執っている手島 (2011) は、生徒が英語を話すだけで良しとしたい教員の心情だったり、教員が発音指導の方法がわからなかったりなどの理由から、生徒の発音はいまだに相手に伝わらない「カタカナ発音」が主流になってしまっていることをはじめ、中学校・高校で行われている発音指導の問題点を指摘している。東後他 (2009) は、「現実の指導は担当教員の裁量によるところが大きいと、かなり本格的に指導を受ける生徒がいる一方で、ほとんど発音指導を受けずに大学に進学する生徒がいるのも事実だ」(p. 39) と教員の裁量によって、生徒が受けることのできる発音指導に幅があることを指摘している。さらに、田邊 (2018) は、「英語科では 4 技能に関する AL (アクティブ・ラーニング) への対応は増加しているものの、英語音声指導、とりわけ発音指導分野では、AL をいかに取り入れるかに関する研究・事例は数少ない」(p. 39) と

指導方法に関する問題点について言及しており、学習指導要領が提唱している主体的・対話的で深い学びを取り入れた発音指導の実現を目指すべきであると主張している。日本英語教育の発音指導は、まだ改善の余地を多く残している。

1.3 中学校の検定教科書分析

では、日本の英語教育界がグローバル社会で求められている「相手に伝わる発音」を習得することに焦点を置いた指導にベクトルを向けていくにはどうすればよいのだろうか。そこで、発音指導の実態を調査・把握することにより、解決策へのヒントが見つかるのではないかと考えた。実態調査の手法としては 1) 経験則をもとにしたもの、2) 教員・学生へのアンケート調査、3) 教科書分析、4) 授業観察・分析（短期・中期・長期）、5) シラバス分析などが挙げられている（田邊・中野, 1999）が、本稿では 3) 教科書分析により、6 社の教科書について音声指導項目（主に発音に関するもの）を分類し分析した。中学校の教科書は学習指導要領に則って作られており、日本で教育を受けているほぼ全員の英語学習者が学習の過程で触れるものである。また、小学校や高校でも英語教育は行われているが、小学校では英語に慣れ親しむこと、高校では高度な内容を英語で表出することに比重が置かれており、中学校での指導が最も発音指導に比重をかけていると推察される。その教科書の内容を分析することが、発音指導の実態を調査するうえで最も有効な手段であると考えた。

2. 先行研究

発音指導に関する教科書分析は、研究対象としてあまり多く取り上げられている分野ではない（上田・大塚, 2011）。しかし、先行研究例を見ていくと、日本英語教育の発音指導がたどった軌跡を垣間見ることができ、発音指導の重要性が高まっていく様子がわかる。

山本（1998）は 1996 年度施行の学習指導要領に則った中学校 1 年生用の英語検定教科書 3 社分を分節音と超分節音の観点から分析し、分節音と超分節音に関する指導ページの一部を抜粋し、そのページに関して説明をしている。分節音の指導に関しては各社とも工夫を凝らしており、フォニックス指導の導入などが特徴として挙げられているが、超分節音の指導についてはあまり十分に扱われておらず改善が求められていた。

教科書出版社 6 社すべてを扱った研究としては、上田・大塚（2011, 2013）が挙げられる。上田・大塚（2011）は 2006 年度施行の学習指導要領に則った教科書各 3 年分を、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、OI（音声表現）指導という 6 項目の発音指導項目に整理し、そ

これらの提示内容や提示方法を分析している。また、各音声項目の提示分布、カバー率を表にまとめ、提示方法についても言及がされている。分析結果から、教科書では大学の音声学で学ぶ基礎的な項目がかなり提示されていることに言及しつつも、教科書によって音声指導項目における重点の置き方や記号の使用などが大きく異なっているという問題点を挙げ、音声項目ごとにその詳細や改善策を提案している。

ここまで言及してきた 2 つの先行研究は、教科書を教科書出版社ごとに横断的に分析しているが、教科書を出版年ごとに縦断的に分析しているのが上田・大塚 (2013) である。上田・大塚 (2013) は 2012 年度施行の学習指導要領に則った教科書とそれ以前に使用されていた教科書を、教科書内の音声指導材料の取扱いや学習者への指導項目の提示量またその方法の変化を縦断的に分析し、考察した。分析結果から、教科書内で大きな変更が見られたのは発音、イントネーション、スピーチ指導の 3 項目であり、学習指導要領で示されているように、より現実的な場面で使用する力をつけるための指導記述が提示されていた。しかし、音変化、強勢、区切りについては、どの教科書においても特に変更は見られず、これでは教員の裁量次第で活用がされるか否かが変わってしまうので、これらについても多少の修正は必要であることが今後の課題として指摘している。

以上のように、大きく変化する学習指導要領に合わせて、検定教科書は発音指導項目に触れる量が増えており、扱われる内容は多岐に渡るようになってきている。しかし、2020 年度施行の学習指導要領に則った教科書を分析した研究はまだない。

2.1 リサーチ・クエスチョン

本稿では、以下の 2 点をリサーチ・クエスチョンとして教科書の分析を行った。

- 1) 発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり (連結・脱落・相互同化)、ポーズ (意味グループごとの区切り)、音声表現指導において、6 社の教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのか。
- 2) 令和 2 年度検定済みの教科書は、上田・大塚 (2011) で扱われた教科書からどのような変化があったのか、そしてその変化から現在の中学校ではどのような発音指導が行われているのか。

3. 方法論

本稿の分析は、筆者が教科書 18 冊すべてに目を通し、発音指導項目の提示の有無、提示方法、提示頻度について、分析項目ごとに表の形でまとめた。

3.1 分析対象

分析対象としたのは、令和3年度に全国で使用されている令和2年度検定済の中学英語教科書6種類であり *NEW HORIZON* (NH)、*SUNSHINE* (SS)、*NEW CROWN* (NC)、*Here We Go!* (HGW)、*BLUE SKY* (BS)、*ONE WORLD* (OW)、の各3学年分、合計18冊のことである。本稿では、各教科書の英語の音声・発音のしくみの提示を行っている部分や独立したコーナーをチェックした。なお、日本で教育を受けているほぼ全員の英語学習者が学習の過程で触れるものを分析対象にする観点から、教員用マニュアルや付属CD、教科書ガイドは分析対象に含まない。

3.2 分析項目

分析項目は、上田・大塚(2011)にならひ、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり、ポーズ、音声表現指導の6項目とし、発音指導項目ごと・教科書ごとに比較しながら分析を行った。強勢とは語・句・文における強勢、イントネーションとは文における基本的なイントネーションであり、orを含む選択疑問文でのイントネーションや平叙文を疑問の意味で用いるイントネーション、そしてwh疑問文を聞き返して用いるイントネーションも含まれる。単語間の音のつながりとは連結、脱落、相互同化の3種類を指し、ポーズとは意味のかたまりを意識した発音指導のことである。音声表現指導とは単なる音読ではなく、その場面に応じた感情などを考えて言葉を発する指導を指す。

4. 結果

以下に、発音記号・強勢・イントネーション・単語間の音のつながりの提示分布、提示頻度を表1から表5にまとめた。なお、○は該当の分析項目の表記があることを表し、×は表記がないことを表している。上田・大塚(2011)では提示分布のみがまとめてあるが、本稿では提示頻度も示している。提示分布のみを示すと提示頻度が1回でも10回以上でも同じ○で示されてしまう。また、巻末のみで提示されている場合もその旨を明示した。教科書本文と合わせて提示をしているか、UnitやLessonの間に発音コーナーのような形で扱われているのか、または巻末のみで紹介されているのかでは、学習者(中学生)の学び方や教授者(教師)の教え方が異なると推察される。そして教科書内における発音項目のカバー率だけでなく、本稿では発音項目内におけるカバー率も表示した。このカバー率から各発音項目がどの程度指導項目として扱われているかが判断できる。[]は扱われた回数を表しており、巻末のみで扱われている場合は[末]と表されている。また、上段のカバー率は、該当の分析項目が6社の教科書のうちどの程度扱われているかを表しており、下段の

カバー率は各教科書がどの程度該当の分析項目を網羅しているかを表している。なお、カバー率は小数点第1位を四捨五入した数値である。

4.1 発音記号

本稿では、上田・大塚（2011）にならい、教育表記としての実用性が認められている表記法を用い、各教科書で使用される母音・子音を22の母音（表1）と24の子音（表2）に分類した。この表記法により、本稿において母音は、前舌母音[i:, i, e, æ]、中舌母音[ə, ʌ, ɔr]、後舌母音[u:, u, ɔ:, ɑ, ɑ:]、二重母音[ei, ai, au, ou, ɔi, iər, eər, uər, ɔər, ɑər]と表記する。なお、三重母音[eiər, aiər, auər]は分類対象に含んでいない。なお、子音では、[ts]、[dz]、[tr]、[dr]は破擦音と分類すること（松坂，1986）もあるが、本稿では上記の通り、教育表記としての実用性が認められている表記法にならい、子音連結に分類した。上田・大塚（2011）では子音連続という用語を使っているが、検定教科書のNHが子音連結という用語を使用しているので、こちらを採用した。なお、他の検定教科書では子音連結や子音連続などの用語を使って説明はしていない。

表1は母音の、表2は子音の提示分布と提示頻度を表している。なお、子音連結の[]は扱われた子音連結の種類の数を表している。なお、下段のカバー率の()内は巻末コーナーのみで扱われている発音項目を除いた数字を表している。

表1

母音の提示分布と提示頻度

	NH	SS	NC	HWG	BS	OW	カバー率 (%)
i:	○[6]	○[10]	○[3]	○[4]	○[1]	○[2]	100
i	○[3]	○[2]	○[2]	○[4]	○[2]	×	83
e	○[5]	○[4]	○[3]	○[2]	○[1]	○[2]	100
æ	○[2]	○[3]	○[3]	○[2]	○[1]	×	83
ə	×	×	○[1]	○[1]	×	×	33
ʌ	○[1]	○[6]	○[1]	○[3]	○[2]	×	83
ɔr	○[1]	×	×	×	○[末]	○[末]	50
u:	○[2]	○[5]	○[1]	○[1]	○[3]	○[末]	100
u	○[1]	○[3]	×	○[1]	○[2]	○[末]	83
ɔ:	○[3]	○[6]	○[2]	○[3]	○[末]	○[末]	100

発音指導に焦点を当てた中学校英語教科書分析

ɑ	○[3]	○[2]	○[1]	○[2]	○[1]	×	83
ɑ:	×	○[未]	○[1]	×	×	×	33
ei	○[3]	○[4]	○[5]	○[1]	○[3]	○[1]	100
ai	○[2]	○[2]	○[6]	×	○[3]	○[2]	83
au	×	○[1]	○[7]	○[未]	○[3]	○[未]	83
ou	○[4]	○[5]	○[1]	○[未]	○[4]	○[未]	100
ɔi	×	×	×	○[未]	○[未]	○[1]	50
iər	○[1]	×	×	○[1]	○[未]	○[未]	67
eər	○[2]	×	○[1]	○[3]	○[2]	○[1]	83
uər	×	×	×	×	○[未]	×	17
ɔər	○[2]	○[1]	○[1]	○[未]	○[1]	○[1]	100
ɑər	×	○[1]	×	○[未]	○[1]	○[1]	67
カバー率 (%)	73 (73)	73 (68)	73 (73)	91 (77)	86 (64)	64 (23)	

表 2

子音の提示分布と提示頻度

	NH	SS	NC	HWG	BS	OW	カバー率 (%)
p	○[1]	○[1]	○[2]	×	○[未]	○[未]	83
b	○[1]	×	○[3]	×	○[2]	○[未]	67
t	○[1]	×	○[5]	○[2]	○[2]	○[未]	83
d	○[1]	×	○[5]	○[1]	○[2]	○[未]	83
k	○[1]	×	○[5]	○[1]	○[2]	○[未]	83
g	○[1]	×	○[3]	×	○[2]	○[未]	67
f	○[2]	○[4]	○[3]	○[3]	○[1]	○[4]	100
v	○[1]	○[1]	○[1]	○[1]	○[1]	○[2]	100
θ	○[1]	○[1]	○[1]	○[2]	○[1]	○[2]	100
ð	○[1]	×	○[1]	○[1]	○[未]	○[2]	83
s	○[3]	○[3]	×	○[1]	○[3]	○[9]	83
z	○[1]	○[2]	×	×	○[2]	○[5]	67
ʃ	○[1]	○[1]	×	○[1]	○[1]	○[2]	83

ʒ	×	○[2]	×	×	×	×	17
h	○[2]	○[2]	×	○[1]	○[2]	○[1]	83
tʃ	○[1]	×	○[未]	○[未]	○[2]	○[2]	83
dʒ	○[2]	×	×	○[未]	○[1]	○[2]	67
m	○[1]	×	○[1]	×	×	○[未]	50
n	○[1]	×	○[1]	×	○[2]	○[未]	67
ŋ	○[1]	×	×	○[1]	○[未]	○[未]	67
l	○[1]	○[2]	○[3]	○[3]	○[1]	○[1]	100
w	○[1]	×	×	○[1]	○[未]	○[1]	67
r	○[2]	○[1]	○[3]	○[1]	○[1]	○[1]	100
j	○[2]	○[1]	○[1]	○[2]	○[3]	○[1]	100
子音連結	○[1]	○[12]	○[5]	○[2]	○[5]	○[6]	100
カバー率 (%)	96 (96)	36 (36)	80 (80)	76 (64)	96 (80)	92 (48)	

分析結果から、最も多く母音をカバーしているのは HWG (91%) であり、以下 BS (86%)、NH・SS・NC (73%)、そして OW (64%) と続く。しかし、巻末にある発音記号表などでのみ扱われている場合を除くと、HWG (77%) が最もカバー率が高く、以下 NH・NC (73%)、SS (68%)、BS (64%)、OW (23%) と続いた。また、分類対象の観点からカバー率をみると、6社すべての教科書で扱われている発音記号 ([i:]、[e]、[u:]、[ɔ:]、[ei]、[ou]、[ɔə]) もあれば、1社でしか扱われていないもの ([uəɾ]) もあった。このように、教科書によって母音の扱いには差があるが、全体の傾向として、①前舌母音 ([i:]、[e]、[æ])、②後舌母音 ([u:]、[u]、[ɔ:]、[ɑ:]、[ɑ:]、[ɔ:]、[ɑ:]、[ɑ:]、[ɑ:])、③二重母音 ([ei]、[ai]、[au]、[ou]、[ɔi]、[iəɾ]、[eəɾ]、[uəɾ]、[ɔəɾ]、[ɑəɾ])、④中舌母音 ([ə]、[ʌ]、[əɾ]) の順に多く扱われていることが提示頻度からわかった。

一方、子音を最も多くカバーしているのは NH・BS (96%) であり、続いて OW (92%)、NC (80%)、HWG (76%)、SS (36%) という結果になった。しかし、巻末での扱いを除くと NH (96%)、NC・BS (80%)、HWG (64%)、OW (48%)、SS (36%) と、序列が変わることが明らかになった。また、母音と同様に、分類対象の観点からカバー率をみると、6社すべての教科書で扱われている発音記号 ([f]、[v]、[θ]、[l]、[r]、[j]) もあれば、1社でしか扱われていないもの ([ʒ]) もあった。子音連結については、全社の教科書で扱われており、SS が最も多く、[ts]、[fr]、[sl]、[st]、[sp]、[bl]、[pr]、[cr]、[fl]、[sk]、[kl]、[pl] が扱われていた。OW ([ts]、[dz]、[tr]、[dr]、[nt]、[str]) が 6 種類と続き、NC ([ts]、[dz]、

[sp]、[spr]、[thr]）と BS ([ts]、[dz]、[tr]、[dr]、[tn]) がそれぞれ 5 種類の子音連結を扱っている。そして、HWG が 2 種類 ([tr]、[fl])、NH が 1 種類 ([ks]) のみの扱いとなった。また、本稿で分析をしている教科書では無音（例：knife の k）も発音指導項目の 1 つとして取り上げており、NH は 2 回、SS は巻末で、NC は 5 回、HWG は 4 回、BS は 2 回、OW は 7 回出現しており、全社の教科書で扱われていた。子音の扱いに関しての全体の傾向として、側音 ([l])、流音 ([w, r, j])、子音連結、無音はカバー率が高いが、破裂音 ([p, b, t, d, k, g])、摩擦音 ([f, v, θ, ð, s, z, ʃ, ʒ, h])、破擦音 ([tʃ, dʒ]) は教科書によってばらつきがあった。

母音・子音の提示分布や提示頻度において、分類対象である母音や子音の観点から特徴や傾向が見られたが、教科書の種類という観点からも特徴や傾向が見られた。NH は母音と子音の両方をまんべんなく発音指導項目として提示しているが、子音の提示が Book 1 (中学 1 生用教科書) でほぼ終了する。SS では母音が他の教科書と同様に高い割合で提示しているが、子音に関しては提示する種類や頻度が母音に比べると格段に少ない。また Book 2 以降は発音記号に関するコーナーには説明書きがない。NC は Book 1 で多くの母音・子音を扱い、Book 3 (中学 3 生用教科書)、Book 2 と発音記号を指導項目として提示する頻度が低くなっていく。HWG は母音・子音の扱いのバランスが一番良い。BS は摩擦音の扱いが 6 社のなかで最も多い。そして、OW は母音の扱いが一番少なく、巻末における扱いがメインであった。

ここまで、発音記号を発音指導項目として提示している分野についての結果を見てきたが、教科書による母音・子音の扱いには大きく差があることがわかった。また、母音は前舌母音が最も多く扱われており、続いて後舌母音、二重母音、中舌母音の順に多く扱われていることが提示頻度からわかった。子音は側音、流音、子音連結、無音はカバー率が高いが、破裂音、摩擦音、破擦音は教科書によってばらつきがあった。音声学的記述は、巻末で扱われている場合が多く、本文に関連させながら音素の発音方法を記載しているのは HWG のみであった。

4.2 強勢

強勢については、検定教科書ごとに語・句・文の 3 つのレベルで分析を行った。表 3 は強勢に関する発音指導項目の提示分布と提示頻度を表している。

強勢の表示法だが、BS のみ ▼ を使い、それ以外の教科書では大小の ● を使用していた。また、● の大きさによってどの程度の強勢を置くべきなのかを示している。以下、教科書の種類別に例などに言及しながらまとめた。

表3

強勢の提示分布と提示頻度

	NH	SS	NC	HWG	BS	OW	カバー率 (%)
語	○[2]	×	○[11]	○[13]	○[4]	○[12]	83
句	×	○[2]	×	○[3]	×	○[3]	50
文	○[25]	○[5]	○[6]	○[48]	○[3]	○[4]	100
カバー率 (%)	67	67	67	100	67	100	

NHでは、Book 1で25文の文強勢を扱っているが、Book 2では強勢についての扱いはなかった。また、Book 3では品詞によって強勢の位置が異なる例 (protest, progress) を2つ扱っている。SSでは、Book 1で2つの文、句を2つ (last weekend, with my family) 扱っており、Book 2でも2つの文を扱っている。Book 3では1つの文のみであった。また、Book 1では強勢に関する説明があるが、Book 2以降は説明書きがない。NCでは、Book 1で10語、対話文を2つ扱い、Book 2で2つの文と対話文を2つ扱っている。以下が対話文の例である。

A: Where's my cat? I can't find her in the car.

B: Look! She isn't in the car. She is under the car.

(NEW CROWN Book 2, p. 101)

対話文を扱っているのはNCのみであり、文脈からどの単語が強く発音されるかを考えさせる工夫がうかがえる。さらに、Book 3では品詞によって強勢の位置が異なる例 (record) を1つ扱っている。HWGでは、Book 1で3語、2つの句、文を10つ扱っている。Book 2では8語、文を17つ扱っている。そしてBook 3で2語、句を1つ、21つの文を扱っている。Book 1からBook 3まですべてに説明書きがある。Book 3では文強勢に合わせて、音のつながりや区切りについても説明がある。BSはすべての項目に説明書きがあり、Book 1で2語、文を2つ扱っている。Book 2では文を1つ扱い、Book 3で複合語を2つ (railroad, cardboard) 扱っている。OWだが、Book 1で3語、2つの句、文を2つ扱っている。またBook 2では6語、句を1つ扱った。そしてBook 3で3語、2つの文を扱っている。なお、Book 1では説明があるが、Book 2以降は説明書きがなくなる。

以上の結果から、文の強勢は大小の●で表すことが多いことがわかった。また、ほかの

発音指導に焦点を当てた中学校英語教科書分析

発音指導項目と同様に、教科書の種類によって、強勢の提示分布・提示頻度に差があった。Book 1からBook 3までを比較してみると、Book 1での扱いが最も多いことが明らかになった。さらに、語、句、文のうち、句の扱いが最も少なく、品詞によって強勢の位置が異なる例を扱っている教科書が2社、対話文を扱っている教科書が1社、複合語を扱っている教科書が1社あった。

4.3 イントネーション

本稿では、イントネーションとは文末のイントネーションを示している。また、上田・大塚（2011）を参考に、肯定・命令文、Yes-No疑問文、疑問詞疑問文、選択疑問文、付加疑問文、列挙、聞き返し、繰り返し、呼びかけに分析項目とした。

表4

イントネーションの提示分布と提示頻度

	NH	SS	NC	HWG	BS	OW	カバー率 (%)
肯定・命令文	○[2]	○[3]	○[1]	○[7]	○[3]	×	83
Yes-No疑問文	○[1]	○[4]	○[1]	○[8]	○[2]	×	83
疑問詞疑問文	○[1]	○[1]	○[2]	○[7]	○[2]	×	83
選択疑問文	○[1]	○[1]	×	×	○[1]	○[1]	67
付加疑問文	○[3]	×	×	○[1]	×	×	33
列挙	○[1]	○[2]	○[1]	○[2]	×	○[1]	83
聞き返し、繰り返し	○[1]	×	○[1]	×	×	○[1]	50
呼びかけ	×	×	×	○[2]	×	×	17
その他	×	×	×	指示文、 感嘆文	Really? 感嘆文	right?	
カバー率 (%)	88	63	63	75	50	38	

本稿で分析した教科書では、イントネーションはすべて矢印（↗、↘）を使って表されていた。表4からわかるように、全体的にイントネーションを扱う回数は少ないが、HWGが最も多くイントネーションを扱っている。また、他の分析項目と比較して特徴的なのは、カバー率100%が1つもないということである。提示頻度の観点から、肯定・命令文、Yes-No疑問文、疑問詞疑問文、列挙のカバー率が高く、付加疑問文と呼びかけのイントネーション

ンは扱われる頻度が低かった。特徴的であったのが、HWGが扱っている文脈を意識したイントネーションの指導である。前後の文脈を感じ取りながら、イントネーションを考えるような工夫が見られた。以下が文脈を意識したイントネーションが含まれている教科書本文である。ここではpleaseを斜体にしてしている箇所があり、強調していることがよくわかる。

Nick: Hi, Granpa. Hi, Granma.

Granma: Hi, Nick. It's almost Christmas. What do you want for Christmas?

Nick: A soccer ball.

Ms. Rios: A soccer ball, *please*.

Nick: Sorry. A soccer ball, please.

:

(*Here We Go!* Book 1, p. 88)

4.4 単語間の音のつながり

単語間の音のつながりは、すべての教科書でスラー（*ˊ*）を使って表されていた。また、上田・大塚（2011）にならい、連結、脱落、相互同化に分類した。なお、本稿では、上田・大塚（2011）で扱われていた「その他の同化」は除外し、相互同化のみとしている。これは、各検定教科書では前進同化（進行同化）と逆行同化について指導の対象としておらず（東後他，2009；松坂，1986）、分類項目として扱う必要がないと筆者が判断したためである。連結は「2つの単語間で前の語の語末が子音、後続語の語頭が母音（または半母音[j])のとき、つながって発音される現象」（p. 25）のことを指す。例えば、make itはmakeの/k/とitの/i/がつながって/ki/と発音される（*BLUE SKY* Book 1, p. 40）。脱落は「2つの単語間で前の語の語末が閉鎖音、後続語の語頭が子音のとき、前の閉鎖音が聞こえにくくなる現象。または同じ子音同士が重なり、前の子音が聞こえにくくなる現象」（p. 25）と定義した。例えば、It looks wonderful.ではItの/t/が聞こえなくなったり（*Here We Go!* Book 1, p. 125）、I want to see it.ではwantの/t/が聞こえなくなったりする（*SUNSHINE* Book 1, p. 82）。また、相互同化は「2つの単語間で前の語の語末の音と後続語の語頭の音が互いに影響し合って別の1つの音になる現象」（p. 25）とした。例えば、Can you join us?のCan youは、Canの/n/とyouの/ju/が影響し合い、/n(j)u/と発音される（*SUNSHINE* Book 2, p. 11）。

表 5

単語間の音のつながりの提示分布と提示頻度

	NH	SS	NC	HWG	BS	OW	カバー率 (%)
連結	○[1]	○[4]	○[1]	○[11]	○[4]	○[4]	100
脱落	×	○[4]	×	○[1]	○[4]	○[3]	67
相互同化	○[1]	○[3]	○[1]	○[3]	○[3]	○[3]	100
カバー率 (%)	67	100	67	100	100	100	

表 5 からわかるように、単語間の音のつながりについては、脱落を扱っていない教科書はあるが、すべての教科書で扱われていた。提示頻度は連結が最も高く、続いて相互同化、脱落となった。教科書別に見ていくと、HWG が最も多く扱っているが、SS、BS、OW も同程度扱っており、教科書間の差は大きくはなかった。また、単語間の音のつながりに関する音声学的説明はなく、リピートさせたり、音がつながっていることに言及したりするのみにとどまっている。また、連結、脱落、相互同化を区別するような説明はどの教科書にもない。

4.5 ポーズ

ポーズは「意味グループごとの区切り」(上田・大塚, 2011) と定義し、分析をおこなった。全社の教科書で少なくとも 1 回はポーズについて扱っているが、最も多く扱っているのは HWG (5 回) だった。以下、SS (4 回)、NC・BS・OW (3 回)、NH (1 回) と続く。

提示頻度からわかるように、全体を通じてポーズを扱う回数は多くない。Book 1、2 で扱われることはあまりなく、ほとんどが Book 3 で扱われていた。また、例を交えた説明が記載されているのは NC と BS のみであり。NC は「日本語の例 (すももも/ももも/ものうち) を参考にして意味の区切りに/を書こう」(Book 1, p. 123) のように、日本語という既存知識と照らし合わせた指示があった。BS では「意味のまとまりを意識して読んでみよう」(Book 3, p. 52) という指示文があり、ステップ 1 として主語と動詞を確認し、ステップ 2 として「何を」、「どこで」、「だれと」、「いつ」という意味のまとまりに分けるようにスラッシュ (/) が引き、意味を捉えながら読むような指導が記載されていた。また、不定詞、名詞節、関係代名詞、接続詞、主節と従属節の区分けを含んだ文の発音指導の際にポーズを意識した発音を指導されていた。

4.6 音声表現指導

音声表現指導については、NH と NC 以外の教科書では、音読を促す指示文であったり、音読の回数を記録するマークがあるのみだった。NH では「対話をしているときの朝美とメグの気持ちを想像しながら感情をこめて本文を音読しましょう」(Book 2, p. 38) のように、本文の内容に照らし合わせた音読指導が記載されている。また、NC は音読やシャドーイングの方法、スピーチ原稿の読み方など目的や状況によって読み方が変わることを指導する箇所があった。例えばスピーチ原稿の読み方として、「ゆっくり」とか「発音注意」など (Book 1, p. 120) のような具体的な指示もあれば、20 歳の自分にビデオメッセージを作るというお題のスピーチでは「未来の自分に話しかけるように」や「トーンを変える」など抽象的なアドバイスや「笑顔で」や「手をふりながら」(Book 3, p.112) のような非言語的コミュニケーションの指導もあった。

4.7 その他の発音指導事項

ここでは、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり、ポーズ、音声表現という分類には含まれない発音指導項目について扱う。

まず、NC、HWG、BS が英語とカタカナを比較することで、英語の発音の特徴を気づかせる指導項目があった。例えば *drum* とドラムという単語を取り上げ、「日本語と発音を比べてみよう」という指示文が記載されている (*Here We Go!* Book 1, p. 34)。これは学習指導要領 (文部科学省, 2019) でも「音声指導に当たっては、日本語の違いに留意しながら」(p. 91) と言及されている指導項目である。

また、NC は身体性を伴った発音指導やアメリカ英語とイギリス英語の違いについて紹介している。ここでの身体性を伴った発音指導とは、対話の音声を聞いて「上げ調子で発音されている場合は手を上げ、下げ調子で発音されている場合は手を下げる」(Book 1, p. 107) という活動や、「単語を言いながら音のまとまりごとに手をたたこう。強く発音するところは、強くたたこう」(Book 1, p. 44) といった音声を身体で表現する指導のことを指す。また、アメリカ英語とイギリス英語については、「アメリカ出身の A とイギリス出身の B の対話の音声」(Book 3, p. 17) を聞かせ、発音の違いに話し合わせる活動を設けている。

さらに、NH、NC、HWG、BS はミニマルペアを使用して音素の発音練習を促したり、リスニングを通しての発音指導があった。例えば、「[si:]see [ʃi:]she と区別する」(*Here We Go!* Book 1, p. 74) のように発音記号と合わせて提示をする場合もあれば、*light* と *right* の発音の違いを学んだあとにリスニング活動を通して音声を確認する活動 (*NEW CROWN* Book 1, p. 26) もある。

5. 考察

以上、音声指導 6 項目について分析をすると、学習指導要領（文部科学省，2019）で示されている項目が教科書で提示されており、基礎的な発音項目が盛り込まれている現状がわかる。ただし、今回の分析から、教科書間の発音指導項目における重点の置き方や提示方法などの差異が大きいという実態も明らかになった。以下に項目別の結果について考察したい。

5.1 発音記号

まず、発音記号については、上田・大塚（2011）の結果と同じように、教科書による母音・子音の扱いや、母音や子音の提示数や提示範囲には大きく差があることがわかった。発音指導項目の取り上げ方は、本文に関連しているもの、リスニング活動と関連させているもの、発音指導のための活動の形で取り上げているもの、そして巻末にリストのような形で掲載しているものなど、様々な形式が散見される。本文に関連させた発音指導項目は、[l]と[r]など中学生が誤りやすいと考えられる発音項目や、本文の内容を理解する上で大切であると判断される発音項目が取り上げられていると考えられる。また、文脈を伴った発音指導につながるので、メッセージ性を感じながらの発音指導をすることができる。しかし、発音指導の内容が本文の内容に大きく左右されるので、基礎的な発音項目を網羅することは難しい。リスニング活動と関連させている発音指導も同様の問題をはらんでいる。発音指導のための活動の形で取り上げているものや巻末にリストのような形で掲載しているものは、発音記号を網羅することは容易にできる。しかし、発音指導に自信がなかったり、発音指導の方法がわからない教員にとっては、授業中に扱いにくい箇所になってしまう恐れがある（手島，2011）。教科書での発音指導項目の取り上げ方が現場での指導に影響を及ぼし、これは生徒が受けることのできる発音指導の差へとつながっていると考えられる（東後他，2009）。

記述方法についても言及したい。HGW 以外の教科書では発音記号を取り上げて、「注意して発音しよう」という趣旨の指導のみにとどまっているが、これは教員の力量や裁量に大きく頼る形の指導になってしまう。教員養成において英語音声学が必修でない以上、記述方法に工夫が必要である（Levis, 2018; 手島, 2011）。例えば、/w/の発音を意識させたいのであれば、「下唇に上の前歯を当て「ヴー」と声を出す」（*Here We Go! Book 1*, p. 50）のように、できるだけ具体的な記述があることが生徒の発音能力向上に寄与すると考えられる。

5.2 強勢

強勢については、ほかの発音指導項目と同様に、教科書によって扱いに差があり、Book 1 での扱いが最も多かった。ここから、中学校での英語学習の土台作りとなる 1 年生の段階で、日本語とは異なる英語特有のリズムを作り出す要素の 1 つである強勢の置き方に、常に注意を払って英語学習に臨む姿勢につながることを期待される。文の強勢のカバー率が高いことは、手島（2011）が指摘している「文ストレスを受けない語の存在を知らないために、英文を読ませても英語特有のリズムに乗せて読むことができず、音節がほぼ等時的に現れる、日本語調の発音になってしまう」(p. 34) という状態を避けることにつながる。一方、句の強勢に関する指導項目は少なかった。これは上田・大塚（2011）と同じ結果である。中学校で扱われる学習段階では、強勢の置き方をあえて教える必要があるほど長い句を扱っていないと考えられる。様々な発音項目を教えることは一見有益であるかのように感じられるが、学習者にとって理解可能なレベルな指導項目であるかは慎重に検討する必要がある。

5.3 イントネーション

全体的にイントネーションを扱う回数は少ないが、肯定・命令文、Yes-No 疑問文、疑問詞疑問文、列挙のカバー率は高かった。イントネーションは、単文で指導するよりも、文脈のある文章や対話文において指導させることが望ましい。時間的制約のある中学校現場において、教科書本文との照らし合わせながら指導を行うことが最も効果的であると考えられる（手島, 2011）。しかし、教科書本文とセットでの指導が効果的となると、本文の内容に指導の内容が大きく影響を受けてしまう。よって、教科書では、肯定・命令文、Yes-No 疑問文、疑問詞疑問文、列挙などを含んだ英文が多く扱われていると考えられる。

5.4 単語間の音のつながり

音のつながりについては、単語間の音のつながりについては、脱落を扱っていない教科書はあるが、すべての教科書で扱われていた。提示頻度は連結が最も高く、続いて相互同化、脱落となった。教科書間の差は大きくはなかった。単語間の音のつながりに関する音声学的説明はなく、リピートさせたり、音がつながっていることに言及したりするのみにとどまっている。リスニングで音のつながりの知識は必要になるので、扱うことが多いが、音声学的な説明は中学生には理解が難しいという判断からか、または教員による説明が困難であるからか、説明を載せている教科書はない（上田・大塚, 2011; 手島, 2011）。これは上田・大塚（2013）でも同様である。

5.5 ポーズ

ポーズについては、全体を通じて扱う回数は多くなく、Book 3 で扱われることがほとんどであった。また、体系立った説明が記載されているのは NC と BS のみであり、不定詞、名詞節、関係代名詞、主節と従属節の区分けを含んだ文の発音指導の際にポーズを意識した発音を指導されていた。短い英文を扱う Book 1 はわざわざ意味のまとまりごとに区切る必要がないが、Book 3 になると複雑な英文を扱うことが多くなり、意味処理を的確かつ迅速に行うためにはポーズを取る指導が有効であると考えられる（上田・大塚, 2011）。

5.6 音声表現指導

音声表現指導に関しては、NH と NC 以外の教科書では、音読を促す指示文であったり、音読の回数を記録するマークがあるのみだった。音読をすることが 1 回で終わりにならず、複数回行うことで、基本的な発音能力の定着には大いに役立つと考えられるが、各教科書にあるスピーキング活動やペア・ワークなどにつなげていくためには、音声表現指導がより強く求められる。上田・大塚（2011）は「感情をこめて外国語で表現することは、中学生にとっては新しいチャレンジとなり、相手に向けて伝えようとすることによって、今回の分析の他の 5 項目にも好ましい影響がある」（p. 29）と音声表現指導の有用性を主張している。単語やイントネーションの指導から、音読までの指導は時間がかかり、時間的制約がある中で指導の実現が難しいが（手島, 2011）、コミュニケーション能力の育成を目標とする授業を作り上げていくためには必要不可欠なステップである（土屋, 2004）。

5.7 その他の発音指導事項

発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり、ポーズ、音声表現という分類には含まれない発音指導項目として、カタカナとの比較や身体性を伴った指導、さらに米英発音の比較、ミニマルペアの活用など、多くのバリエーションが検教科書に盛り込まれていることが分かった。これらの多くは、2012 年度施行の学習指導要領に則った教科書とそれ以前に使用されていた検定教科書を比較した上田・大塚（2013）にも言及のなかった発音指導形式である。教科書にとって新しい形式が現れた背景に、田邊（2018）で主張されている「気づき・発見」を促す発音指導の推奨が挙げられる。令和 3 年度施行の学習指導要領には、学習には「主体的・対話的で深い学び」を通して行われるべきだと提言されており、これを発音指導に落とし込んでいると推測される。

6. 結論と今後の課題

本稿では、令和 2 年度検定済の中学校英語検定教科書における発音を中心とした音声指導項目に焦点をあて、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・相互同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、音声表現指導の 6 項目を整理し、それらの提示内容や提示方法を分析し、6 社の検定教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのかを考察してきた。結果として、教科書それぞれに特徴があり、発音指導項目に対する重点の置き方や提示方法・提示頻度には差があることがわかり、この点に関しては先行研究として挙げた上田・大塚（2011）と同じ結果であった。しかし、山本（1998）や上田・大塚（2013）が明らかにしたように、改訂前の教科書と比べると、明らかに発音指導項目が充実しており、その提示方法は豊富になった。これは発音指導に対する意識の向上の現れであり、歓迎されるべき傾向である。しかし、まだ課題は山積しており、今後も改善する努力は必要である。以下に、教科書が改善していく必要であろうと考える課題を提示する。

まず、他技能と結びつけた発音指導を盛り込んでいくことである。Munro and Derwing（2015）や Levis（2018）は、発音は単独で指導されるよりも、スピーキングやリスニングなど何らかの活動の中で発音指導を組み込んでいくべきであると主張している。音声表現指導はこれに当てはまるが、現在の教科書では、扱われ方が限定的であり、改善が求められる。

次に、Intelligibility Based Pronunciation Teaching の導入である。Intelligibility とは “how easily a listener can identify the individual words or phrases that a speaker produces.” (Walker et al., 2021, p. 7) のことであり、英語で世界中の人々をつなぐグローバル社会では必要な力であるとされている。Intelligibility を向上させていくためにはすべての発音項目を指導する必要はなく、指導項目の取捨選択が大切である (Levis, 2018)。この観点から教科書では、どの項目を取り上げ、どの項目を指導しないかなど、指導の強弱を教科書で提示していくことを求めている。

最後にアプローチの再考である。田邊（2018）では、日本の英語教育において発音指導は「Intuitive-imitative approach（直感・模倣的アプローチ）と Analytic-linguistic approach（分析・言語的アプローチ）を中核に、さらに各々に付随するさまざまな指導技術を組み合わせながら指導してきた」（p. 42）と概観し、学習指導要領で提案されている「主体的・対話的で深い学び」を発音指導にも導入していく必要があると主張されている。上記 2 つのアプローチは一定の効果を上げているが、今後は、田邊（2018）で提唱されている「学習者の心的内面、特に認知面（cognitive/meta-cognitive aspects）を考慮し、発音

習得過程に関係する学習因子である動機づけ、発音学習への興味・関心の呼び起こし、練習の意味づけ、*learning strategies*（学習戦略）、達成感・自信などを、指導過程に適宜取り入れる」（p. 43）ことを目指していく必要があると考えられる。

義務教育段階である中学生の教育に関わる教科書の内容は、日本全国の中学生の英語学習を下支えする大切な学習教材であり、インプット教材である。日本の未来を担う中学生の学習環境を、教科書という側面からより良質なものにしていきたい。

注

本稿は TALK 定例会（2021 年 9 月 25 日）における口頭発表をもとに加筆修正したものである。

謝辞

査読者の方と Dialogue 編集委員会より貴重なご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献

- Levis, M. J. (2018). *Intelligibility, oral communication, and the teaching of pronunciation*. Cambridge University Press.
- Munro, J. M., & Derwing, M. T. (2015). Intelligibility in research and practice: teaching priorities. *The handbook of English pronunciation*, 377–396.
- Walker, R. (2010). *Teaching the pronunciation of English as a lingua franca*. Oxford University Press.
- Walker, R., Low, E., & Setter, J. (2021). *English pronunciation for a global world* [PDF]. Oxford University Press. www.oup.com/elt/expert
- 上田洋子・大塚朝美 (2011) 「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析—インプットの基礎を考察する—」『大阪女学院大学紀要』, 7, 15–32.
- 上田洋子・大塚朝美 (2013) 「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析—新旧学習指導要領での扱いの変化について—」『大阪女学院大学紀要』, 10, 1–15.
- 開隆堂編 (2021) 『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3』.
- 教育出版編 (2021) 『ONE WORLD English Course 1, 2, 3』.
- 啓林館編 (2021) 『BLUE SKY English Course 1, 2, 3』.
- 三省堂編 (2021) 『NEW CROWN English Series 1, 2, 3』.
- 田邊祐司 (2018) 「英語科における「主体的・対話的で深い学び」：音声指導を中心に」『専修大学外国語論集』, 68, 39–52.
- 田邊祐司・中野香 (1999) A constructive examination of English pronunciation work: The

case of college pron-related textbooks. 『山陽論叢』, 6, 65–86.

土屋澄男 (2004) 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 研究社.

手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声指導について—発音指導の現状と課題—」 『音声研究』, 15(1), 31–43.

東京書籍編 (2021) 『NEW HORIZON English Course 1, 2, 3』.

東後勝明・御園和夫・松坂ヒロシ・高本裕迅・阿野幸一 (2009) 『英語発音指導マニュアル』 北星堂書店.

文部科学省編 (2019) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』.

松坂ヒロシ (1986) 『英語音声学入門』 研究社.

光村図書編 (2021) 『Here We Go! ENGLISH COURSE 1, 2, 3』.

山本久仁子 (1998) 「英語発音をめぐる教育環境—入門期の発音指導の現状—」 『国際経営フォーラム』, 10, 171–187.